年　組　名前

道新でワークシート

ニジマス生残率90％目標

市と４漁協、花咲港で海面養殖２年目

高水温対策 大型の幼魚2500匹投入

【根室】市と市内4漁協でつくる市べニザケ養殖協議会（会長・大坂鉄夫根室漁協組合長）は11日、海面養殖用のトラウトサーモン（ニジマス）の幼魚2500匹を花咲港のいけすに投入した。2年目を迎えた実証試験で11月下旬に水揚げする予定。初年度は夏の高水温で大半が死んだため投入する魚を大型化し生残率90％を目指す。

根室市の花咲港のいけすに投入された海面養殖用トラウトサーモン

2016年に禁止されたロシア200リカイ内サケ・マス流し網漁の代替漁業を探る取り組みの一つ。国内は冬に養殖し夏に水揚げするのが一般的なのに対し、根室は低水温を生かし夏に育てて秋から冬に出荷するのが目標だ。

市水産研究所によると、いけすは昨年と同じ直径14メートル、深さ5メートルの1基。投入した幼魚は十勝管内更別村で1年半近く育てた1匹平均1キロ、全長45センチほどの個体で、昨年の平均360グラム、全長30センチ程度の個体と比べて重量は約2・8倍になる。魚を大型化し、高水温が見込まれる場合は早く出荷できるようにした。投入数は昨年より500匹少ない。

いけすは花咲港内に固定し、最終水揚げは1匹平均2・5キロ、2250匹（約5・6トン）、生残率90％を目指す。既に事業化している東北地方では、海面養殖用のトラウトサーモンを年間千トン以上を出荷している地域もあるという。

トラウトサーモンはベニザケより丈夫で育てやすく、18度以下の低水温を好む。昨年は夏に水温20度以上の期間が1カ月半続いて大半が死滅し、水揚げは投入した3千匹のうち64匹、1匹平均0・8キロにとどまった。今年は魚を大型化したほか、真水の環境から海水に適応させる時間を昨年の2時間から6、7時間に延ばし魚への負担を減らした。市水産研究所の工藤良二所長は「夏にサーモンを養殖できれば地域も元気になる。あらゆるデータを取り、将来につなげたい」と話している。（津野慶）

年　　組　　名前

道新でワークシート

① 国内では冬に養殖し、夏に水揚げするのが一般的なのに対し、根室では夏に育てて秋から冬に出荷するのを目標にしているのはなぜでしょう。
（　　）に当てはまる言葉を書きましょう。

根室の海の（　　）を生かせるから

② 初年度は夏の高水温で大半が死んでしまったことから、今年度工夫した点を２つ書きましょう。

・

・

③ 国内の他の場所と違う時期に水揚げすることでどんなよいことがあるでしょう。
具体的に考え、書いてみましょう。